
孤独な男の幻想入り

牙練

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な男の幻想入り

【Nコード】

N8248Y

【作者名】

牙練

【あらすじ】

—— 家族を失い、幻想郷と言う架空の世界に縋りつく青年。
彼はあらゆる物・事を増減する程度の能力を使い幻想入りした。
彼は優しい。しかし、彼は現実とも折り合いを付けながら幻想郷を
生きていく——

よく解る解説：主人公編（前書き）

今のうちに書いておかないと後々面倒なんで。

よく解る解説：主人公編

直人

年 20

身長 男子高校生並み

血液型 O型

容姿 普通・黒髪・黒い瞳

性格 お人よし・優しい・意外に熱い・面倒くさがり

能力 あらゆる物・事を増減する程度の能力

詳細：能力を使い脅迫染みた行動をしようとした時、スキマに落ちた。

紫と初対面時に愚者と呼ばれる。

その後和解。

普段は無表情な顔をしている。

クールかと言うとただ単に不器用なだけである。

ここぞと言う時、感情が溢れ出す。

様は感情的。

一夫多妻を願望にしているが、叶わない夢と諦めている。

尚、鈍感では無いが自分に向けられている好意は自分に向けられている物では無い・一時の気の迷いと決め付ける。

年上には敬語を使うが、砕けた相手に使う気は無い。

無神経に人の気に障る事を聞いてしまう。

家事は基本的に出来るが、料理・洗濯はまだまだ。

現在の姓は博麗を名乗っている。（と言うより、名乗らされた。）

能力説明：あらゆる物と事象を増減する。

物は増やしたり減らしたり出来る。

人物を増やす・減らす事は出来なくも無いが、寿命を使うので多用

（と言うか使わない）しない。

持病・感情・寿命・能力・身体能力・免疫などを増やしたり減らしたり出来る。

正し、減らす場合は必ず“1”残る。

増やす場合上限が無ければ何処までも増やせる。

……特殊な行動をした際は問答無用で全能力が増える。

彼はまだ純情です。

弹幕：基本的には丸いが、集中すればどんな形の弹幕になる。

威力を増やしたり減らしたり出来る。

場合により一瞬で消滅してしまう程の弹幕も撃てる。

様はスペルカードルールを無視した威力とも言っ事。

The Grimoire of Marisa

ドーピングタイプ

自らの身体能力を飛躍的に上げて攻撃を仕掛けるタイプのスペルカ

ード・弹幕。

妖怪の賢者の論：彼は不安定な精神をしている。あの吸血鬼の妹よりは強いけど、我を忘れてしまったら非常に不味い存在になるわね……。

幻想入りする際も、脅迫染みた行動を取ったし。

余程追い込まれる事さえ起きなければ良いけど……。

よく解る解説・主人公編（後書き）

と言う設定です。

専門的知識（前書き）

東方Projectを知らない人が読んだ場合を想定して作ってみた。

専門的知識

スペルカードルールとは、幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールである。「命名決闘法」という呼び方もあり、技のほうを「カードアタック」と呼ぶこともある。

弾幕やスペルカードは「本当に花火と同じ」であり、名前を付けないと作品になりえない。

この作品では、弾幕を撃てない人間が多く——主に人里の住民——対等と言えるのかと聞かれたならば違うとしか言えない。尚、特定の妖怪達は人間を殺さない契約を交わしている。

その代わり、八雲紫が“外の世界”から自殺希望者・自殺した遺体・死刑囚などを攫い、契約を交わしている妖怪に提供している。

もともと、人間を嬉々として殺すと言う訳では無く、その命を糧にさせて貰うと言う感情で殺している妖怪が多い。

人間風に言うならば、人間が取っている“食事”に該当する。

関係無いが、“いただきます”は命を食べると言う意味である。

一部は人間を玩具にしたり飾りにしたりしていたが、現在はそんな事はしていない。(この小説及びそれ以外の小説の大多数。)

The Grimoire of Marisa

霧雨魔理沙がスペルカードについてメモをしたノートより抜粋
一部スペルカードの種類について書かれている。

魔理沙はノートの中で「ルールの無い世界では弾幕はナンセンスである」と語り、八雲紫の『弾幕結界』や藤原妹紅の『インペリシャ

ブルシューティング』のような「攻撃するよりも人に見せる事」に重きを置いた『演劇タイプ』のようなタイプのスペルカードは純粋な殺し合いをする場合ではナンセンスであると語っており、改めてスペルカードが『殺し合い』を『遊び』に変えるルールであるという事実を強調している。また魔理沙は綿月依姫に対してスペルカードの説明をする場合、「この世でもっとも無駄なゲーム」であると教えている。

種類

演劇タイプ

人に見せる事を重視したタイプのスペルカード。魔理沙はこういったタイプの弾幕が生まれる理由をスペルカードが「遊び」だからであり、殺し合いの為に使うのはナンセンスなタイプのスペルカードであると語っている。

奴隷タイプ

幽霊や人形、使い魔などを使役して攻撃させるタイプのスペルカード。使用者のスキルが高くなければ使えないがコストパフォーマンスが良い攻撃が多い。類型に「インビジブル奴隷タイプ」「自爆型奴隷タイプ」「演劇奴隷タイプ」「純粋奴隷タイプ」なども存在する。

バグタイプ

適当に弾をバラ撒くタイプのスペルカード。力の弱い妖怪が使う事が多いらしい。

ストレスタイプ

避ける側の動きなどを制限するタイプのスペルカード。移動型と視覚型、神経毒型や複合型など種類が多い。

ドーピングタイプ

自らの身体能力を飛躍的に上げて攻撃を仕掛けるタイプのスペルカード。

因みにこの小説の主人公は、弾幕と身体能力を増減できる“特化型”である。

フラクタルタイプ

一定の形をして次から次へと模様が生まれるタイプのスペルカード。

スペルカードについて

スペルカードというのは自分の攻撃に名前をつけたものという設定であり、各スペルカードには、攻撃からイメージできる名前がつけられている。

基本的には・符名「カード名」という形式で名前が付いている。

・符名

符名の部分には、カード名などをイメージした単語が入る。大抵「*符」（氷符、月符etc）の形の漢字二文字が入る場合が多いが、それ以外の2文字（神罰、想起etc）や3文字以上（正体不明etc）の単語が入っているものや、アルファベット（QED）が入っているものも存在する。また、一部の難易度の高いスペルカードには符名が付いていない場合もある。

・カード名

カード名は、文字通り「カードの名前」を表す。カード名は「」（鉤括弧）で括って表記される。カード名は、そのスペルカードの攻撃をイメージした様々な名称が付けられている。

・ラストスペルについて

名前の通り、“最後の”もしくは“切り札”と言う意味。

大体は本気を出す時、切羽詰った時、危機的状況化を覆す時に使用される。

通常のスペルカードと比較するとやや難度が高く、威力と弾幕数が倍。

・ いーえつくすか EX化について

通常状態で使っている能力とは違う、別の能力を発現させること。または、能力を発揮させた状態。覚醒状態ということもある。

ノーマルで登場していたキャラが、別能力を発動させたときに使うキャラ設定上で別の能力がある場合に「EX化」といい、急激に攻撃が激しくなる。

「発狂状態」とは区別される。

二次創作作品で、オリジナルの能力を発動させる場合でもEX化とすることがあるが、この小説の主人公の場合は“覚醒化”と予定。

因みに代表的な人物は“上白沢慧音”だけらしい。

EXルーミアと言う存在も確認されているが、二次創作設定らしいので統一されていない。

統一されている設定。

(容姿)

? 大人っぽいプロポーションになる。

? 髪形がロングまたはベリーロングになる。

? 背中に羽が生える。

? 闇の妖怪らしく、生える羽は漆黒。

? 逆に純白の羽が生えた場合はかなり不味いらしい……。

? カリスマが大幅に増量。

? 巨乳になる。

? 大きな十字剣を持つ。

? 刀身に対して柄や鍔の部分が長いデザインの剣。聖者の十字架をイメージ。

? 剣は漆黒のことが多い。

? 基本的な服装は変わらないことが多い。

? 漆黒のドレスのまま。

尚、リボンが封印になっており、自ら外せる時もあれば誰かに外してもらった必要がある。

この小説の場合は、外してもらわなければならない。

専門的知識（後書き）

長い……。

因みにこの設定は一部を除いて借りてきた。

優しい青年の暴挙（前書き）

何も完結していない馬鹿の、何時もながらの暴走です。

優しい青年の暴挙

「現代の何処か」

青年は1人、生きてきた。

生まれた頃からでは無い。

ただ、姉夫婦は事故で死に両親は流行病で無くなった。

親戚は引き取ると言ってくれたが、青年は断った。

それから青年は高校を卒業した後、働いて働いて生きてきた。
そんな生活が2年続いた。

——語弊がある。

働いて働いて“能力を使つて”生きてきたが正しい。

彼がこの能力——あらゆる物・事を増減する程度の能力——を
手に入れた出来事は、家族の死であつた。

現実に絶望し、自ら命を絶とうと考えてた矢先の時だつた。

彼は体力を増やし肉体労働をこなし、ダイエットの臨時講習の仕事を請けた際受講者の体重を減らしたり、金を増やしたり地雷を減らしたりして能力を使つていた。

彼は決して、自分の欲望を満たすために人に迷惑を掛ける事はしなかつた。

だが、それでも彼は“孤独”だつた。

彼は孤独を嫌つていた、それなのに彼は優しすぎた存在だつた。

自分では無く他人の悩み・悲しみ・憎しみを何とかしてあげたいと考える、そんな青年だつた。

表情・表面には出さないが、彼はそんな人間だつた。

だからこそ、彼は“都市伝説”に縋りたかつたのかもしれない。

PCで見たことのあるキーワード“東方Project”

全部を見た訳では無いが、隔離された世界“幻想郷”と言う世界があると言う事。

其処には少ない人間と“妖怪・神・妖精・亡霊・鬼”が住む世界と言う。

彼はそんな世界に行つて見たいと思った。

しかし、其処に行くには“忘れ去られる”と言う方法が“隙間妖怪”と言う存在に連れて行つて貰う以外に方法は無かった。

彼が其処に行きたいと強く願つたのは、家族の死だった。

もし家族が生きていたらこんな考えは若気の至りとなっていた筈だけれど、肉親が居なくなり孤独感に襲われた彼に縋るしか無かったのが幻想郷だった。

だからこそ、彼は親戚の引き取りを断り存在を忘れ去られようとした。

——けど、結局上手く行かなくて——

彼は幻想郷に行けなかった。

いつか行ける事を夢見て、生きてきた。

最早それは、妄信と言ふべきか。

それでも彼は幻想郷に行く事を求めて止まない。

しかし、最早彼も手段を選ばずにはいられなかった。

「本当はこんな手段を使いたく無かったが……。」

前記にも記した通り、彼は私利私欲の為に人に迷惑を掛けたくないと考えるお人よしだった。

しかし、彼は限界だった。

だからこんな“暴拳”に出た。

—— 幻想郷の存在を“増やし”、俺の存在を“減らす”！——

彼がそう念じようとした時。

くぱあ！

足元に“スキマ”が開いた。

青年は居なくなった。

幻想入りを果たした。

ただそれだけ。

優しい青年の暴挙（後書き）

今回は頭の中で自己完結しない。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（前書き）

落ちるゝ落ちるゝ ♪ 俺達 ♪

名前は今回で解る筈。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？

（スキマ内）

彼は落ちている。

何処までも何処までも落ちていく。

不意に浮遊感に包まれた。

「ここは……？」

そう呟いた時、背後から声がした。

「ここはスキマの中よ。」

彼が振り返る。

其処に居たのは、金髪で帽子らしき物を被り、傘を持っている女性

（少女？）が佇んでいた。

「まったく、幻想郷の存在を増やそうなんて、何を考えているのか

しら？ねえ、“愚者”さん？」

「……何で愚者？」

彼は疑問を口にし、女性は笑み——仮面の——を浮かべこう告げる。

「それはそうよ。だって貴方——」

——幻想郷を“消滅”させようとしたのよ？——

驚くほど冷たい声。

顔は笑顔なのがさらに恐怖を煽る。
そんな状況の中、彼が取った行動。
それは――

「え？」

彼は地面に頭を付け、ひれ伏した。
土下座である。

「すまなかつた。」

心底詫びる声で謝る青年。

毒気を抜かれた女性は、啞然としたが直ぐに平常になり質問をした。

「謝る位ならしなければ良いと思うのに……。」

「まったく持つてその通りだ、返す言葉も無い。」

女性は思った。

――この男、あんな大それた事をしようとしながら此処まで謝る
と言う事は――

「貴方は幻想郷に来たかったのかしら？」

ビクリッ！と彼が身体を震わせる。

その様子は、母親に叱られる前の子供に見えた。

女性はため息を付きながら、理解した。

（様は幻想入りしたくて、でも出来なくて仕方なくって所かしらね。
）

女性はこの青年をどうするか決めかねていた。

——幻想郷を消す力を持つ存在を受け入れる、それはかなり危険な賭けね——

けれど、女性の答えは決まっていた。

「良いわ、許してあげる。」

「……………え？」

「正し、条件を付けるわ。」

「条件？」

其処まで言って女性はもったいぶる様な——悪戯を思いついた子供の様な——素振りを見せる。

「……………条件は？」

「条件は——」

——幻想郷の起爆剤、もしくは投じられた一石になる事——

それが女性の条件だった。

注意事項も付いてくる。

「正し、外の技術を広めない事。里の人間が外の世界に興味を持ち始めたら幻想郷は消滅する。」

「何故？」

「簡単な話よ。幻想郷は元々行き場を失った妖怪達の最後の樂園なのよ。外の技術が発展すると共に妖怪は存在しない生き物となった。いえ、“最初から居なかった”とされてしまったが正しいかしら。」

「……………現代社会が妖怪を追放したって訳か……………」

「幻想郷に人間が居る理由も知りたいかしら？」

試す様な目で女性は問う。

青年はその目を逸らさず答える。

「是非。」

「よろしい。本来妖怪は“人の恐怖”から生まれた存在であり、人が恐怖しなければ妖怪は存在しない事になる。だから妖怪は人を襲い、人は妖怪を恐怖した。」

「幻想郷は“人間を飼い殺す”世界って事か？」

「……間違いでは無いわね。幻想郷は人と妖怪が共存してる世界とは言っけれど、実際は妖怪が人間を見下している様な物ね。もっとも最近はその認識を改めてはいるけれど、全員がそう思っている訳では無いのよ。」

「だからあんたは俺に起爆剤になれって言ったのか。そういった角質を無くし、平等で対等な世界を作らせる為の。」

「まあ、幻想郷内で悩み・苦しんでいる人や妖怪を助けても問題ないわ。」

青年はふと思う事がある。

「なあ、俺は“危険”じゃないか？」

「……………」

作り笑いを浮かべ、黙する。

「正直に言ってくれないか？」

真剣な眼差し。

女性は表情を何とも言え無い顔にする。

「正直言って、貴方は危険よ。危険所じゃない、下手すれば“爆弾

”を抱える様な物よ。」

「なら、何で…。」

「……それはね、幻想郷が“全てを受け入れる”からよ。」

——もつとも、最初から危険な奴は入る前、入った後滅するけどね

♪——

そう言って、とびきりの笑顔を見せる。

「……それにね、似てるのよ貴方は。」

「似てる？」

「ええ、私の知り合いにね。」

——後は、貴方が寂しそうな目をしていたからかしら——

青年は目を見開く。

「何……で……！？」

「………解るわよ、長く生きてますもの。」

「………そうかい。」

「何があつたか、何に絶望したかは聞かないでおくわ。」

「すまん……。」

その後、幻想郷について色々聞いたり、スペルカードルールなどを教えてもらった青年。

「ふう、久々に説明するから疲れちゃった。」

「あゝ、何かすまん。」

「良いわよ別に。しかし、貴方って謝ってばかりね。」

「………負い目があるからな。」

「それもそうね。」

「所でさ。」

「何かしら?」

「お互い自己紹介して無いよな?」

「うふふふふふふふ!」

「くくくくくくくくく!」

2人して爆笑する。

それから互いに自己紹介をする。

「俺の名は直人。名字は捨てた。」

「私は八雲 紫と申します。」

「何故敬語?」

「ノリよ」

そうして、そろそろ幻想入りするかと思いきや紫が質問してきた。

「貴方は夢とかあるのかしら?」

「……………下らない願望なら?。」

「お聞かせくださる?」

「勘弁し」
「駄目」……………。」

少し躊躇した後、蚊の鳴く様な声で“願望”を言った。

「……………一夫多妻。」

「……………」

紫は沈黙していた。

「な／＼／＼！わ、悪いかよ！？」

「……………うふふ」

「何だよその笑い！？笑いたければ笑えば良いだろう！」

「いえね。別に深い意味は無いわよ？」

「嘘だ！」

「まあ、そこら辺は男の子って事で」

「俺は20だ！」

「あらい外！背が小さいから18歳かと。」

「うがあああ！」

直人は身悶えている！

「まあまあ、幻想郷には美人・美少女がいっぱい居るわよ？勿論私も美少女だけど」

「……………美少女？」

その瞬間、空気が死んだ。

地の底から聞こえてくる様な声で、紫が聞いてくる。

「何か文句でもあるのかしら？」

「イイエメツソウモナイ。」

とりあえず、いよいよ幻想入りする事となった直人。

「じゃあ、博麗神社に落とすわよ？」

「結界の管理する場所だっけ？」

「そうよ。……………今はまだ期待できないけど、期待してるって言わせなさい。」

「女たらしでも良いのなら。」

「ふふ。それじゃあお決まりの台詞を1つ。」

——幻想郷へようこそ——

くぱあ！

直人の足元にスキマが開いた。

「落ちて行くのかあああああああ！？」

「当たり前よ。私の素を見た代償よっ」

こうして、直人は幻想入りした。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（後書き）

紫の口調がこれで合っているか心配な件。

今回の設定は元ネタがある。

ニコニコ動画『東方星母録』の出来事が元ネタ。

知りたければ見れば良いと思うが、超憂鬱展開があるから半端な気持ちで見ない事。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（前書き）

博麗神社に落ちた直人。

空中から地上まで1 m位。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！

〔博麗神社・境内前〕

此処は博麗神社。

結界の要の場所であり、“異変”を解決する巫女が住んでいる。

その名は“博麗 霊夢”と言う少女だ。

この少女、色々と怖い存在でもある。

異変解決の為なら原因らしき存在を倒し、行く手を阻む者や進路に立った者も倒して進む。

冷血・冷酷と言う訳では無いが、解決する為なら手段を選ばない。

もつとも、解決した後は宴会を神社で開く事が最近の日課になっている。

尚、彼女の神社は貧乏である。

…………… 自給自足をしていると言う噂もある。

そんな霊夢は今日も賽銭があるか確認した後、箒で境内前を掃いていた。

「ふう、最近暇ね……。参拝客も来ないし……。」

この前の異変“神霊廟異変”を解決したのだが、これと言って平穩が続いていた。

「ふう……。ん？」

その時、目の前にスキマが現れた。

ドスンッ！

そんな音が聞こえた。

スキマから何か落ちてきたのだ。

それは人間の男性だった。

「……………」。(ピクピクッ！)

顔面から落ちたので、かなり痛いと思う。

霊夢は警戒しながらも少し慌てながら安否を気遣った。

「だ、大丈夫？」

返事はこう返って来た。

「大丈夫……だ……、問題……無い……。」

グッ！と親指を立てる直人。

「案外タフね。」

直人の隣に上半身をスキマから出している紫がツッコむ。

「ちよつと紫。これ何よ？」

「幻想入り希望者よ。」

「意味が解らないんだけど……。」

「まあまあ、どの道外の世界で能力が覚醒してたみたいだから、一応この世界に連れて来たのよ。」

「……………こいつの能力は？」

「……………あらゆる物・事を増減する程度の能力よ。」

霊夢は直人を見据える。

——あの紫が幻想郷に危害を及ぼす存在を連れてきた？——

霊夢にとってそれは考えもしない出来事だ。

「勿論条件付きだけどね。」

「条件？」

「まあ、幻想郷の今の角質を何とかして欲しいって言うね。」

「無理でしょ？紅魔館の面々は少し認識を改めているけど、野良妖怪はそうもいかないわよ？」

「だからこそよ、私はこの男の“可能性”を見てみたいのよ。」

扇子で口元を隠し微笑む。

「……………あんた、何か悪いものでも食べた？」

「失礼ねえ。ちゃんと藍の料理を食べてきました。」

「じゃあ何でこんな奴を信じるのよ？」

「そうね……、一目ぼれかしら」

「……………似合わない。」

「まあそれは冗談として、初対面の私の——殺気を放った私の——素を見たのよ？」

「珍しいわね。あんたが崩されるなんて。」

「自分のした事にちゃんと自覚を持ち、非があるのを理解して謝罪してきたのよ？信じるに値するわよ。」

「ふん……、それより何時までそいつはその状態なの？」

落下時からその体勢な直人。

まあ理由はだ。

「あゝと……、なんかシリアスだったんで立つに立てなくなりました……。」

「はあ、まあ良いわ。私は博麗 霊夢、この神社の巫女よ。」

そう紹介されたので、直人は立ちあがり紹介を返す。

「直人だ。名字は捨てたので無い。」

「あら？何でよ？」

「まっ、色々あったんだよ。」

「八雲の名字居る？」

「謹んでお断りします。」

「あらつまらない。」

そんな会話をしてる内に、時刻は昼頃になった。

紫はスキマで家に帰った。

霊夢は紫に頼まれて直人を住まわす事にした。

「良い？雑用はやって貰うわよ？」

「解った。」

「しかし、とんだ暴拳に出たわね……。其処までして幻想郷に来たかったなんて。」

「まあ、あつち少し息苦しいからな。」

「と言つか、女誑しって何よ。」

「悪いかな？」

「襲つてきたら潰すわよ？」

「無理やりとか趣味じゃ無いからこつちから願ひ下げだよ。」

「ふう、食材足りたかしら？」

「無いの？」

「3日分しか無いのよ……。買い物行かなきゃ。」

「ちよつと食料見せて。」

「……1人締めは許さないわよ。」

「しないつての。」

〔博麗神社・台所〕

外の世界と同じ作りだった。

「何故に？」

「あのね、流石にそこら辺は普及してるわよ。」

「電気とか水道も？」

「ええ、たしか妖怪の山と霧の湖からかしらね。」

「何か凄い名前出てくるな。」

「覚えておいた方が良くわよ。後で教えてあげるから。」

「うい。」

直人は冷蔵庫を開けた。

「少ないな。」

「うるさいわね。家は貧乏なのよ。」

「酒を製造してるって紫さんから聞いたぞ？」

「それはそれ、これはこれ。」

「お約束だな。まあ良いや、とりあえず“増えろ”」

そう言つと、食材が“新品同様”になつて増えていた。

「な!？」

「これが俺の能力だ。使い道は色々あるが、食材を増やすつてのは外でもしてきたからな。」

「ね、
ね
ね
ね
え
え
え
え
え
え
？
？
？
？
？」

「**落ち着け。**」

「お金も増やせるの？」

「出来るぞ、しかも新品。」

「……………ちよつと待つてなさい！ 良い！ あんたは今日から博麗 直人と名乗りなさい！ はい決定！」

「ちよつと待てえええ！？何故に！？」

「便利!!!」

「ちつたあ本音を隠せ！！！」

「イヤッホーイ♪これで脱貧乏よおおおおお!!!」

こうして、霊夢は狂喜乱舞をしながら金を取りに行った。残った直人は呟く。

「俺、幻想郷生活が不安になってきた……。」

こうして、幻想郷での生活が始まった。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（後書き）

霊夢のキャラが崩壊してる様な……。

まあ良いか。

妖怪の恩恵があるから自給自足出来るらしいんだけど、誰かが貧乏とか言った所為で貧乏になったとか。

スターライトシューターの襲来！

〔博麗神社・縁側〕

直人が博麗の名字を――強制的に――授かり、神社に来てから1日が経過した。

空き部屋だった所を直人の部屋にして貰った。

下着などは紫がスキマで送ってくれていた様で、直人の部屋に置いてあった。

そして、今日は神社の周りを掃除し終えたので縁側で茶を飲んでいた。

ズズッ

「ふう……。」

「今日も平和ねえ……。」

「平和で良くないか？」

「暇になるのよ。」

「そうかい。」

和んでいた、所に向かいの空に黒い影が見えた。

「あれ何？」

「あゝ、またたかりに来たわね……。」

「知り合い？」

「腐れ縁よ。」

「幻想郷の住人は空を飛べるとは聞いてたけど、本当なのか……。」

「直人も飛べるわよ。」

「そーなのかい。」

そんな会話をしてる内に、見る見る影は近づいてきて庭に降り立った。

「霊夢ー！茶を貰いに来たぜー！」

「帰れ。」

「うわ、身も蓋も無い。」

無常の言葉にツツコミを入れる直人。

金髪をしていて、どっかの魔法使いが被る帽子を被った、白いエプロンの下に黒い服を着た少女が直人に気づいた。

「あれ？お前誰だ？」

「俺の名前はn「博麗 直人よ。」ちよっ！？」

「へー、博麗……………ゑ？」

「もちつけ、色々と言いたいと思うがまず冷静になつて」け、結婚したのかお前等／＼／＼／＼／＼！……………こうなつたか……………」

「ち、違いわよ／＼／＼／＼！そんなんじゃ無いわよ！こいつの能力が便利だから博麗の名字をあげたのよ！」

「へ？能力？」

〈巫女説明中〉

「なるほど、その増減する能力で貧乏を脱出できるからか。」

「そういう事よ。」

「清しい程本音を隠さないな。」

「当たり前でしょう。」

「流石霊夢！無常だぜ！」

「褒めてどーする！？」

埒が明かないのでそろそろ名前を聞く事にした。

「あんたは誰なんだ？」

「ふっふっふ！良くぞ聞いてくれた！私の名前は幻想郷最それk「元でしょ。」……………霧雨 魔理沙、普通の魔法使いだぜ……………」

「霊夢！流石に酷いだろ！？元氣無くなったぞ！？」

「あら御免なさい。長つたらしいのめんどくさいのよ。」

「鬼か！？」

「鬼は萃香よ。」

「誰だ!？」

「家に住み着いている鬼よ。」

「あははははは!」

魔理沙が笑い出した。

そんなこんなで夫婦漫才的なやりとりを終え、3人で茶を啜っていた。

「へー、脅迫地味な行動を取ろうとして幻想入りって凄いいんだぜ。」

「下手すれば幻想郷が消えてただけだね。」

「……………すみません。」

「まあまあ、終わりよければ全て良しって言うじゃないか。」

「終わり良ければね……………」

「何故含みを入れたし。」

不意に直人は昨日霊夢から説明して貰った事を思い出した。

「なあ、俺も空を飛べるのか？」

「うーん、能力持ちは大抵飛べるんだけど……………」

「直人の能力で飛べないのか？」

「……………やってみる。」

直人は庭に立っている。

意識を集中させ、飛ぶイメージを浮かべる。

(しかし、能力を使って飛ぶって言われてもなあ……………)

その時、何かを思いついた。

(これなら行けるか?)

そしてある部分を増やす事にした。

——浮遊感、浮遊力を“増やす”——

瞬間。

フワッ

体が浮いた。

直人は恐る恐る目を開けると、神社の鳥井が見える高さまで“飛んでいた”。

「あ……。」

——これが、幻想郷——

そこから見える景色は、今まで見てきた中で一番思いでに残る景色だった。

不意に、隣から声が聞こえる。

「どう？幻想郷の景色は？」

「絶景だろ？」

いつの間にか隣に来ていた霊夢と魔理沙が聞いてきた。

その質問に直人はこう答えた。

「最高！」

「よろしい。」

「ははは！」

3人で笑いあった。

その後、地上に下りて今日1日は空を飛ぶ練習を少しやった後、“弾幕”の出し方と“弾幕ごっこ”の練習をする事になった。

スターライトシューターの襲来！（後書き）

幻想郷の景色見てみたいなあ……。

メール・感想があればよろしく。

弹幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弹幕の美しさと多様さ（前書き）

スペルカードルールは、幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールである。「命名決闘法」という呼び方もあり、技のほうを「カードアタック」と呼ぶこともある。

弹幕やスペルカードは「本当に花火と同じ」であり、名前を付けないと作品になりえない。

スペルカード - Wikiより抜粋。

正し、この小説では“殺す”事も視野に含まれる。

弹幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弹幕の美しさと同様さ

（境内前）

今現在、直人は弹幕ごっここの練習をする事になった。

「所で、弹幕出すにはどうすれば良いんだ？」

直人が尋ねる。

「そうね、基本は霊力が気力で出すのよ。」

「無えよ。」

「とりあえずやってみるんだぜ。」

「うい。」

直人は意識を集中させる、前に質問。

「形とかは？」

「そこは自分が思い描いたイメージよ。」

「と言っても、大体は自分にあった形になるんだがな。」

「ふーん。」

改めてイメージをする。

——形は“球状”で行こう——

すると、直人の掌に“小さな球状弹幕”が出た。

「……………」

「……………ぷつ。」

「……………ぷくく。」

笑いを堪える2人。

「笑いたきゃ笑え……………」

その瞬間、笑い声が響いた。

それから数分後、笑い声も止み弹幕の大きさを試行錯誤していた。

霊夢と魔理沙はそれを見ている。

「しかし、何で小さいんだ？ 気力が少ないとか？」

「それなら威力は減って速さが遅くなるだけよ。大きさは関係無いわ。」

「じゃあ何でだろうな？」

「さあ？」

そんな2人の話をよそに、直人は1つの推測を建てていた。

（もしかしてこれ、増やすんじゃないか？ 大きさを増やすって念じれば出来そうだし。そういえば、霊力の“力”も増やせるんじゃないか？）

そう考えて直ぐに実行に移す。

—— 形は球状で、大きさを増やし、霊力を増やす ——

すると、先程より大きな球状弾幕が出た。

魔理沙が歓喜をあげる。

「おお！ 出来たじゃないか！」

褒める魔理沙の横で、霊夢が直人に質問した。

「どうやったの？」

「いや、増やしたんだ。」

「増やした？」

「ああ、大きさを増やした。霊力とかもな。」

「…………… 霊力を増やした？」

「な、何か不味いか？」

「ねえ、それって“魔力”も増やせるの？」

その言葉に魔理沙が反応する。

「おいおい霊夢、流石に魔力が無い人間に増やせる訳ないだろう。」

「…………… いや、多分出来ると思う。」

「え？ 出来るのか？」

魔理沙の質問に対し、直人は自分の考えを言う。

「物体とかは一部が無ければ増やせないけど、自分自身を増やす場合は0でも増やす事は出来るんだよ。前に身体能力を増やすって増やしたとき、試した力があつたんだ。」

「それは？」

「予知能力。」

「何でそんな能力を試したのよ……。」

「いや、宝くじでも当たるかなあって……。」

「で、結局どうなったんだ？」

「増やせたんだよ。結局怖くなって止めたけど。」

「怖くなった？」

霊夢が以外そうに聞いてくる。

「能力に溺れそうになりそうだからね。」

「なるほど。」

「所で、何時までその弾幕を出しているんだ？」

直人の球状の弾幕が未だ其処に存在している。

「何かのとか無い？」

「じゃあ、其処の岩を壊して。」

「何で岩があるんだぜ？」

「萃香が酔って持ってきた。」

「じゃあさ、威力を何処まで増やせるか試して良い。」

「神社に被害が無い程度にね。」

「解った。」

そして、増やす事30秒。

「じゃあ、行くぞ！」

手を前にかざし、撃つ！

ビュン！

ポーンッ！

凄い速さと圧倒的な威力で岩が粉碎された。

『……………。』

これには3人、開いた口が塞がらなかった。

不意に、霊夢が言った。

「威力を増やす場合は10秒までね。」

^{アイサー}
「了解。」

「しかし、凄い威力だぜ……。フランよりあるんじゃないか？」

「誰だ？」

「吸血鬼の妹だぜ。」

「吸血鬼なんて居るのか。」

「行って見たいか？」

「うーん、今日は霧の湖って所行きたいんだが……。」

「じゃあ大丈夫だ！湖の近くに住んでいるからな。」

「じゃあ時間があったら行こうかな。」

「よし！私が案内してやるぜ！」と言う事で、こいつ借りてくぜ！」

「ちゃんと返さないよ。」

「物じゃ無いんだが……。」

こうして、霧の湖に行く事になった直人。

其処にはどんな出会いが待っているだろうか？

弾幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弾幕の美しさと多様さ（後書き）

因みに、直人の能力の真髄はまだこんなものじゃ無い。

霧の湖に住む者達とその友人達（前書き）

とりあえず、今回は？に定評があるバカルテットが出てくる予定。
大妖精も出る。

魔理沙の必需品

・魔法の筈

魔法使いの必需品

・ミニ八卦炉

魔力を燃料とする小さな火炉で、一晚じっくり煮込むようなト口火から山一つ焼き払える異常な火力まで調節が利くという。マスター
スパークもミニ八卦炉に呪文をかけて使用している。

伝説の金属または合金の緋々色金ヒィロカネで出来ている。

・お手製魔法爆弾

魔理沙が作った爆弾。

帽子やスカートの中などに隠し持っている。

霧の湖に住む者達とその友人達

く上空・霧の湖付近く

直人と魔理沙は現在、空を飛んでいた。

「な、もう少しスピード上げようぜ？」

「無茶言ふなよ……、今の季節が春過ぎだからって流石に寒い。」

季節は春が過ぎて少し経った頃だった。

リリーホワイトが居るか居ないかの境界線をうろついていると理解して欲しい。

兎も角、2人は霧の湖に向っていた。

しばらくして、霧が出ている大きな湖が見えた。

「お、！凄いな……！」

「だろ？」

「何故えばる？」

「ノリだぜ！」

「へー。」

「何だよその気の抜ける返事は……。」

「とりあえず降りてみるか。」

「無視かい！」

2人は湖に降り立った。

辺りは霧が出ており、視界は良好とは言え無い。

「いつも霧が出てるのか？」

「いや、流石に向こうが見えないほど霧は出ない筈なんだが……。」

その時、前方から氷が“飛んできた”！

『！？』

魔理沙はそのまま横に避け、直人は3秒増幅させた弾幕を放つ。

パリンッ！

氷は粉々に砕け散る。

「何だ！？」

「……おいチルノ！行き成り何しやがる！」

魔理沙は氷を投げた犯人の名前を言う。

その質問に答えは返って来ない。

様子がおかしいと感じた魔理沙は、ミニ八卦炉構えながら霧の向こうに近づく。

すると、直人が何かに気づいた。

「なあ。」

「何だ？」

「もしかして、あそこに居ないか？」

「何処だぜ？」

直人が指差す方向を見ると、チルノ達は直人達の右側——湖の対岸——で野球をしていた。

「でも、何で前から？」

「あ、今凍りの塊が打たれた。」

その打たれた氷は霧に入り、何かぶつかりながらこちらに近づいてくる音を出す。

「まさか……。」

その言葉を放った後、氷が先程と同じように霧から出てきた。

直人はその場を離れていたので氷はそのまま直進して消えた。

「マジでか……。」

「とりあえず、行ってみよう。」

直人達は野球をやっているチルノ達の元に来ていた。

チルノは悔しそうに、緑色の髪をしていて——触覚が出ている——

——羽を生やした少女に文句を言う。

「ムキー！何で簡単に打つのよ！リグル！」

リグルと呼ばれた少女は困った顔をする。

「いや、打たないとゲームにならないから。」

その隣から——黒い服を着ていて、眼は赤く、髪は黄色、髪の毛に赤いリボンを巻いている——幼い少女が会話に混ざる。

「チルノの弾は真っ直ぐだから打ち易いのだ！」

両手を大きく広げてチルノに厳しい言葉を掛ける少女——ルーミア。

「うう。だってアタイは変化球苦手だし。」

「大丈夫だよチルノちゃん！練習すればきっと出来るよ！」

「そうよね！天才のアタイに不可能は無いわ！ありがとう！大ちゃん！」

「どういたしまして！……って、天才は関係無いよ！？」

大ちゃんと呼ばれた緑髪の少女——大妖精は的確にツツコミを入れる。

その時、向こうから歌いながら喋る少女が声を掛けてきた。

「みんなー♪八目鰻やおでんが出来たわよ♪」

夜雀の翼を生やす少女——ミステリアが呼びかけた。

直人と魔理沙は毒気を抜かれていた。

「どーする？怒るに怒れないよ？」

うーんと唸る魔理沙。

「故意じゃ無いからなあ……。」

そう考えている時、大ちゃんが直人達に気づく。

「あれ？あそこに居るの魔理沙さんと……誰？」

4人も一斉に魔理沙の隣に居る直人を見る。

「本当だ。誰だろう？」

「里の人間にしては随分珍しい服装ねえ。」

「食べても良い人類かー？」

3人が口々に疑問を出し合う中、チルノが直人達に近づいた。

「やい！そこのお前！」

行き成りチルノに話しかけられ、直人は驚いた。

「うお！？な、何だ？」

驚いたが、冷静に返事した。

「アタイとしょーぶしろ！」

「ええー？」

その言動を聞いていた大ちゃんが慌てて止めに入る。

「止めようよチルノちゃん！初対面の人に何でもかんでも喧嘩売っちゃ駄目だつて慧音先生に言われたじゃない！」

「止めないで大ちゃん！アタイはさいきょーだから、こんな弱そうな男に負けたりはしないわ！」

「流石に弱そうは無いだろ……。」

直人はため息を付く。

しかし、チルノに助け舟を出したのは魔理沙だった。

「良いじゃないか！戦ってみるよ！」

「うおい！」

「よし！なら早速始めるわよ！」

チルノはカードを取り出し、宣言する。

「ちょ——」

「氷符『アイシクルフォール』！」

瞬間、チルノの両手から氷弾が放たれる！左右から挟みこむように撃たれている。

しかし、至近距離にも関わらず、攻撃は当たらなかった。
何故なら。

“真ん中には氷弾が飛んでこないからだった”。

「……………」

霧の湖に住む者達とその友人達（後書き）

次回は紅魔館に行けたら良いなあ。

メールとか感想とかください。

霊夢「賽銭もね！」

帰れ。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

（前

直人のスペルカードは紅魔館を“本当の大団円”後である。

まあ、基本チートに近い能力なので制限である。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

く霧の湖く

直人達は屋台で八目鰻を食べていた。

「何でこんな弱そうな奴に負けるのかな？」

「弱そう言っな。」

「まあまあ、身体能力を上げなきゃ弱いじゃないか。」

「うぐっ!？」

上からチルノ・直人・魔理沙の会話。

因みに魔理沙は、直人が戦ってる間に直人の詳細をミステイア達に教えていた。

…………女たらしも含めて。

「見た感じ大人しそうなのに、以外に狼？」

「肉食なのかー？」

「近づいちゃ駄目よ。」

「ちよつとミスチーちゃん!? 言い過ぎだよ!？」

「魔理沙ああああああ!!!!!!」

「はははははははははは!!!!!!」

「おんなたらして何？」

ワイワイガヤガヤッ!

その後、色々からかわれたり再戦を申し込まれたりした過ごした。気づけば日が高い所に上っていた。

時刻：3：00

直人は魔理沙の用事を聞いた。

「行かないのか？紅魔館つて所。」

「おおっと！そうだったぜ！」

「忘れてたのかよ……。」

そしてミステリアに代金を払った。

因みに能力で増やして渡したのでかなり驚かれた。

「わぁ！」

「凄い！」

「しかもこれ新しいよ！」

「そーなのかー！」

そんな感じで賞賛を浴びてたら、チルノが挙手をする。

「ふん！アタイもそれくらい出来るわよ！」

「いや、流石に無理なんじゃ……。」

「さいきょーのアタイに不可能は無いわよ！」

直人は内心やれやれっとため息を付きながら、チルノの手伝いをする。

「行くわよ！」

チルノがお金を持ち増やそうと念じる素振りをする。

チャリンツ！チャリンツ！チャリンツ！

金が増えた。

『凄い！』

6人——内2人は合わせて——は歓喜の声を上げる。

「やっぱりアタイったらさいきょーね！」

そんな中、直人達は紅魔館に向う準備をする。

その様子にチルノが気がつく。

「ちよっと！何処行くのよ！」

「ああ、ちよっと紅魔館まで。」

その言葉にチルノとルーミア以外が声を上げる。

『ええ！？』

「と言う訳だ、私達は行くぜ！」

「またな！八目鰻美味しかったよ。」

そう言つて空を飛ばうとした時、チルノが言った。

「アタイも行くわ！」

「私もー！」

これには全員驚いた。

『何故！？』

その疑問に対する返答はこうだ。

「アタイが居れば問題ありよ！」

「面白そうだからー！」

「チルノは問題あるのかい！ルーミアは面白半分かよ！？」

ツッコミが冴え渡る。

まあ、何かあつても護れば問題ないとは思うが不安ではある。

「大丈夫よ！なおとは弱そうだけど、アタイが助けてあげるわ！」

「勝つてから言え。」

「う……。」

「……約束してくないか？」

「え？」

不意に直人はこう言った。

「危なくなつたら逃げる事。それが約束な。」

「でも、アタイが居れば……。」

「万が一もあるからな。で、どうする？」

「……解つたわ、でもあんたも約束しなさい！」

「何を？」

「アタイと“友達”になりなさい！」

——言葉が詰まつた——

（友人を置いていった自分に友達になれって…。）

動揺してる時、魔理沙がこう言った。

「何言ってるんだぜ？もう直人とチルノ達は友達だろ？」

その言葉は直人の心に響いた。

だからこそ、直人はチルノ達にこう言った。

「そうだな、チルノや大ちゃん、リグルにミスチーにルーミアは俺の友達だな。」

その答えに5人は笑顔を浮かべ笑った。

その後、何故か他の3名も着いてくる事になり、紅魔館へ向った。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

（後

次回こそわあああ!!!!

紅魔館へ行くぜ！

紅魔館：中国妖怪の門番は眠れる龍（前書き）

紅 美鈴さんの出番です。

パーティーメンバー

直人・魔理沙・チルノ・大妖精・リグル・ミスティア・ルーミア

弾幕ごっこも入れるが、そうじゃないバトル要素も入れる。

紅魔館： 中国妖怪の門番は眠れる龍

く上空・紅魔館付近く

直人達は紅魔館に向っていた。

「そついえばさ、紅魔館って吸血鬼の他に住んでいる人居ないのか？」

魔理沙が答える。

「居るぜ。中国だろ？パチュリーに小悪魔に咲夜つてのが住んでるだぜ？」

「あのか、中国つてもしかして美鈴さんの事じゃあ……。」「大ちゃんがおずおずと訂正する。」

「何で外の世界の国名で呼ばれているんだよ……。」

「へえく、外の世界の国名だったか。いつも中国つて呼ばれているから気にしなかったぜ。」

「不憫な……。」

直人が不憫に思っている時、チルノが声を掛けた。

「ほら！見えてきたよ！」

「相変わらず”紅い”わね……。」

「目が痛い……。」

——紅魔館、幻想郷の「妖怪の山」の麓、「霧の湖」の畔に建つ洋館であり、その外観は全体的に紅い色調をしていて、館の前の道も一面の紅になっている。

さながら、“ブラッドロード（血の道）”と呼べるだろう。

時計台もあり、夜中12時にのみ鐘になる——

余談だが、この館の主“レミリア・スカーレット”は実例年齢は大人以上だが精神年齢は“子供”なので、館を実質取り仕切っている

のはメイド長の十六夜咲夜である。門番として紅美鈴がおり、湖側から館の敷地に進入しようとしてくる妖精などに対して積極的に迎撃を加えている。レミリアの妹であるフランドール・スカーレットも館内におり、他にも多数の妖精がメイドとして在住している。館内は咲夜が空間をいじって見た目以上に広くなっている。

「説明ありがとうミスター。」

「どういたしまして。」

「でも何で知ってるの？」

「慧音先生の授業で阿求って女の子が来て教えてくれたのよ。」

「何でも幻想郷の歴史を全て覚えているらしいのだ！」

脱空気を回避する為にルーミアが捕捉を入れてくれる。

…… 此処だけの話、美鈴は門番専門だけではなく、花畑管理の庭師でもある。

そんなこんなで、紅魔館に到着する。

〔紅魔館・門前〕

日が少し傾いてきた頃、直人達は門前の着地した。

「ふう……。」

「なんだ？疲れたのか？」

「いや、そういう訳じゃ無いんだが……。」

—— 空気がおかしい ——

直人の第一印象はそんな感じだった。

どうやら魔理沙も何かを感じ取ったらしい。

「何だ？何か変な感じが……。」

そして、その原因が解った！

それは——

——美鈴が起きているからだ——

「ちょっと待ってくださいよ！？何ですか！私が起きていてはいけませんか！？」

美鈴のツツコミに全員の返事はこつだった。

『うん！』

「ひ、酷い……。」

よよよ……、と泣き崩れる美鈴を無視して館に入ろうとしたが。

「つて！？何勝手に入ろうとしてるんですか！？」

『チツ！』

「舌打ち！？」

何と言うネタのオンパレード。

「もうネタはいいですから！」

とりあえず、美鈴は決まり文句を言う。

「とりあえず、様の無い方はお帰りください。特に魔理沙。」

「私が何をしたって言うんだぜ？」

「パチユリー様の本を盗んでいつてるでしょう！」

直人は魔理沙を——超白い目で——見る。

「魔理沙……、お前って奴あ……。」

「ち、違つんだぜ！？借りてるんだぜ！？」

「死んだら返す」盗みでしょう！」

「うわあ……。」

少し引く。

「頼むから引くな!？」

「まあ漫才は置いて。」

「うおい!？」

直人が美鈴を見る。

「……そういえば、貴方は誰ですか？」

「外来人の直人だ。故あって博麗神社に住んでいるんだ。」

「へへ、あの巫女の所にですか……。食費が削られていそうですね。」

その言葉に魔理沙が捕捉を入れる。

「所がどっこい!こいつの能力のお陰で貧乏&食料危機を脱出したんだぜ!」

『ナ!ナンダッテ!』

当事者と事情を知る者以外、全員驚いていた。

何故か幻想郷の終わりだとか、明日はお札が降ってくるとか声が聞こえる。

そんな中、美鈴は何故か満面の笑みを浮かべた。

「直人さんでしたよね？」

「そうだけど。」

「では、私と闘いませんか？」

「おお!珍しいな、温厚なお前が自分から勝負を仕掛けるなんて。」

「ええ、あの巫女の貧乏を救ったと言う能力を見てみたいですからね!」

「いやまあ、良いけど。勝負は弾幕で?」

「そうですね、後は接近戦でも良いですか?」

直人はその言葉の意味を——悟られ無い様に——考えずに返答した。

「良いよ。」

「おい、待て——」

魔理沙の声は続かなかった。

何故なら。

——美鈴が全速力で直人に迫っていたのだから——

不意打ちとも言えるその行動は、誰もが目を見張らせる。

ドゴッ！

——終わった——

誰もが思った時、驚愕をしていたのは美鈴だった。

「……な……！」

「危ねえ……。」

直人は美鈴の突きを“受け止めていた”。

美鈴は妖怪の中でも接近戦だけなら大妖怪でも互角に戦える。

それなのに唯の人間が妖怪の一撃を素手で受け止めると言う事は、かなり異常な事だ。

美鈴の思考が混乱している内に、直人は美鈴の腕を掴み遠心力よりしくで投げた。

「くっ！」

すかさず空中に浮き、体勢を整えようとした時に直人が眼前に迫っていた。

思わずカードを発動。

「華符『芳華絢爛』！」

2色の全方位弾による弾幕が直人に殺到する！

ビュンッ！ビュンッ！ビュンッ！

速度も速い方なので、直人は美鈴の追撃を諦めて弾幕を見据える。
「減ろ！」

その言葉と共に、弾幕の数が減っていき1つしか残らなかった。
その弾幕を避ける。

美鈴は直人がした事を見て、何らかの能力を使用したと判断する。
（なるほど、何かを減らす能力ですか……。あれ？それだと霊夢の
貧乏が無くなると言うのはおかしい様な……。）

未だ確信を持ってない美鈴に対し、直人は弾幕を放った。
「あらよつと！」

小さな弾幕が1つ発射される。
しかし、その速度は速い。

「舐められたものですね！そんな小さな弾幕を避けられないと――
――」

美鈴が油断をしているその瞬間、直人は叫ぶ。

「増える！」

「！？」

小さな弾幕が見る見る内に増えていく。

その数は小さいと言えど100は超えた。

「そういう能力ですか！」

大方の予想は付いた、後はこの弾幕を乗り切れば勝機はあると判断
する美鈴。

「華符『破山砲』！」

虹色のエネルギーを放出させな斜め上にパンチを放つ。

ドゴオオオオンッ！

斜め上から迫っていた弾幕が消し飛んだ！

「……………」

「行きますよ！」

突破口を開き直人に接近する。

直人は何もせず、美鈴を見つめる。

「諦めましたか！」

「そうだな、唯の女たらしが此処までやれるとは思わなかったよ。」

「そうですか、以外に獣みたいでしたね！」

そしてそのまま斜め蹴りに入る。

「これで終わりです！」

「油断大敵だぜ？」

「え？」

その瞬間、美鈴の身体から力が抜けた。

浮遊感も徐々に抜けていく。

「きゃあ!？」

そのまま落下した。

（——ぶつかる！）

そう思い、目を閉じる。

ガッ！

直人が受け止めた。

「大丈夫か？」

「……………え？え？」

状況が判断できないが、徐々に理解した様で。

「~~~~¥¥¥¥¥¥¥¥」

「いや赤くなるなよ……。」

「お、降ろしてください！」

「はいはいと。」

ゆつくりと美鈴を降ろす。

美鈴はまだパニック状態だった。

（まさか……“お姫様抱っこ”で受け止められるなんて……）

流石にそんな経験は無かったので、顔を赤くする美鈴。

こうして、この戦いは直人の勝利で終わった。

因みに、直人が美鈴をお姫様抱っこで受け止めた時、女子6名は何故か不機嫌になったのは余談である。

紅魔館： 中国妖怪の門番は眠れる龍（後書き）

うん、長い。

感想くれ。

紅魔館：完全で瀟洒なメイドの思惑

〔紅魔館・門前〕

美鈴に勝利したのだが、6名に機嫌が悪くなっている事に気がつく。
「ど、どうした？」

「何でもないんだぜ！」

「何でもありません！」

「何でもない！」

「他に同じく！」

「同じく！」

「お腹空いたから食べても良い？（超笑顔）」

「……………俺が何をしたら……………」

因みに上から、直人・魔理沙・大妖精・チルノ・ミスティア・リグル・ルーミアです。

そんな光景を少し羨ましそうに見ている美鈴の横から声が掛かる。

「何をやってるの中国？」

「中国じゃありません……………って、咲夜さん！？」

突如現れた女性は——メイド長は——咲夜だった。

「まったく、接近戦を得意とする貴女が負けるなんて……………」

「うう……………すみません……………」

「まあ良いわ。……………大方の予想がつくし。それで、どんな能力が解った？」

「はい、どうやら増やしたり減らしたり出来る能力かと思えます。」

「能力の範囲は？」

「恐らくほぼ可能かと。」

「ふむ……………」

咲夜は考えた。

（お嬢様の“運命”では、今日も魔理沙が本を盗みに来るって言うておられたけど……。）

見慣れぬ男と見慣れた妖精達が魔理沙と共にやって来た。そして、その男は美鈴を倒した。

能力は増やし減らす事が出来て、制限がほぼ無い。

この言葉からとある事を画策する。

「門を開けなさい美鈴。」

「良いんですか？」

「ええ、お嬢様の能力ですら読めなかった人物ならお嬢様の退屈も凌げるでしょう。」

「解りました。しかし直人さんって女たらしだったとは……。」

「あら？そうなの？」

「見たいですよ？」

「毒牙に掛かったのかしらね？」

「聞こえてますよお二人さん。」

直人がツツコミを入れた。

とりあえず、直人はいつの間にか現れた咲夜に質問する。

「あんたは誰だ？」

「これは失礼。紅魔館でメイド長を勤めさせてもらっております、十六夜咲夜と申します。以後お見知りおきを。」

優雅に自己紹介をする咲夜。

その動きに無駄が無い。

「メイドらしい紹介だぜ……。」

「余りやらないからね。」

魔理沙の驚いた感想に咲夜は悪戯っぽく返す。

そんな中、直人も咲夜程では無いが自己紹介をする。

「これはこれのご丁寧に、私目は直人と申します。今は故あって博麗神社に住んでいる居候の身でございます。以後お見知りおきを。」
優雅では無いが、それなりに様になっていた。

「こっちはこっちで礼儀正しい感じだな。」

「いや、流石に慣れないな。」

とまあこんな会話。

その後、屋敷の中に入れてもらう事になったが、魔理沙は強制連行だった。

「何で私まで行かなきゃならないんだぜ？」

「また本を盗むからよ。」

「借りているだけだぜ？」

「死んだら返すってそんなに待てないわよ。」

「せっかちな奴だな。」

「何と云うか、魔理沙の人間性が解ったよ……。」

「どーいう意味だ。」

とまあ案内されながら進む。

チルノ達も内装をみて色々感想を言っている。

因みに直人込みで館内に入った時の第一感想は『紅い！』だった。

しばらくして、少し大きな扉の前で止まった。

「此処がお嬢様のお部屋です。」

「此処が……。」

「決して粗相の無いように。」

そう言つて、咲夜は消えた。

「なあ魔理沙。」

「何だ？」

「咲夜さんの能力って何？」

「時間を操る程度の能力だぜ。または時を止める程度の能力だぜ。」

「戻せる事は？」

「出来ないらしいぜ。」

会話を終え、目の前の部屋をノックする。

コンコン。

「…………開いているわ。」

「失礼しますよ。」

そして、直人は出会った。

——永遠に紅い幼き月に——

紅魔館：完全で瀟洒なメイドの思惑（後書き）

咲夜さん、何かを企む。

レミリアは次回に出せたら出したい。

感想寄越せ！

紅魔館：永遠に紅い幼き月の疑問（前書き）

レミリア・スカーレットの定番。

さて、ネタが微妙に無い。

紅魔館：永遠に紅い幼き月の疑問

「紅魔館・レミリアの寝室」

直人は少し驚いていた。

「あんたが……レミリアか？」

そう疑問を投げかける。

何故なら——見た目幼女だから。

「……………（ギロツ！）」

ひっ！？

「いや、地の文に突っ込むなよ……。」

魔理沙が呆れて指摘する。

「あら失礼な所を見せたわね。——ようこそ、紅魔館へ。名も知らぬ人間の男よ。」

「おやおや、これは失礼。名前を名乗り忘れていました。私の名前は直人と申します。以後お見知りおきを。」

礼儀には礼儀を返す。

まあ、ノリに合わせたと言う事だ。

「ふふっ。以外にノリが良いのね。」

「何となくやってみただけだよ。」

「あら、謙遜しなくても良いのに。」

……直人は別に意識してやっていなかったが、レミリアの背後には何故か黒い闘気が出ていた。

「何でオーラが出てるの？」

ミステリアが疑問に思った。

「それで、この館に何をしに来たのかしら？」

レミリアの質問に対し直人はこう答えた。

「魔理沙の付き添い？」

「何で疑問なのよ……。」

呆れるレミリア。

「いや、本を借りに行くって魔理沙が言うから普通に借りに行くのかと思つて付いてきたんだけど……。」

「盗みに行くって事は知らなかったって訳ね。」

呆れ顔で魔理沙を見る7人。

「死んだら返すって。」

「あのねえ、あんたが盗んで行くからパチエの機嫌が悪いのよ。」

「魔理沙……。」

直人は最早言葉が出ない。

「と、兎も角だ！図書室に行かせて貰うぜ！」

そう言つて、魔理沙は箒に跨り勢い良く部屋を出て行った。

「止めなくて良いのか？」

「止められる程弱いなら、今此処に存在しないわ。」

「なるほど、つまり戦つた訳か。」

「何故そう思うの？」

「直感。」

「……ふはははは！面白いな直人よ。」

「何その無駄に溢れるカリスマな言葉遣い。」

「どうだ？この館で働かないか？」

「スルーか。あと無理だから。」

「何故？」

「霊夢に全殺しにされる。」

「そう、残念ね。」

全然残念そうな素振りもせず、言葉を放つレミリア。

「とりあえず、魔理沙を止めてくる。」

「出来るの？」

「多分ね。それで、何処に行つたか解りますか？」

「この館には地下まであるのよ。その地下にある“大図書館”に居る筈よ。」

「うい。つー訳だ、手伝ってくれ。」

直人が振り向き、チルノ達に声を掛ける。

「アタイに任せなさい！」

「が、頑張ります！」

「そーなのかー。」

「まあ此処まで来ちゃったし。」

「そうね。」

5人の返事を確認し、部屋を後にする直人達。

部屋に残ったレミリアは、考え事をしていた。

——あの男の“運命”が見えなかった。何故だ？——

思考の迷路に迷う吸血鬼。

しかし、思いのほか直人の行動に驚かされるとは思っていないと言う事に、まだ気づかない。

紅魔館：永遠に紅い幼き月の疑問（後書き）

次回にご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8248y/>

孤独な男の幻想入り

2011年12月1日18時52分発行